

I-1 「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》としての実践」

望ましいコミュニケーション態度を育みながら、英語を用いて他と関わる

－会話上手になるための方法をペアワークを通して探る(第1学年)－



英語を通して、クラスメイトのことを知っていくことを楽しいと感じる生徒は多い。自分のことを表現し相手のことを尋ねながら、クラスメイトの意外な一面や自分との共通点を知ることができ、英語の授業を通して、新しい友達関係を構築することも可能になる。子どもたちは、自分のことを英語で語り合う中で、コミュニケーション活動に必要な態度を身につけながら、会話を続けるための表現や方法を仲間と共に学んでいく。

1 学びの構想

英語の授業3年間を見通した際に、中学校1年生の初期段階での学びは、特に態度面において、今後の学びに大きな影響を与えると思われる。そこで、今回は、単元の構想にあたり、以下のことを特に大切にしたい。

よりよい人間関係の構築に向けて

自己紹介をするという場面では、お互いのことをあまり深くは知らないという状況があり、そこでは、自分のことをよく知ってもらいたい、自分のことを受け入れてほしいという意識を持つことが大切である。そして、相手に質問をするという場面では、相手のことをもっと知りたいという思いを持ち、質問の答えから自分との共通点や友達の意外な一面を見出し、相手の情報を上手に引き出しながら話をつなげていくという視点を持たせたい。このような話し手と聞き手の望ましい態度を育むことが、お互いのことをより深く理解していくことへの手助けとなり、自己紹介活動を通して、より良い人間関係の構築を可能にしていくと考えている。そして、英語の授業では、このより良い人間関係の構築こそが、安心して自分の考えを相手に伝えたり、相手の意見に聞き入ったりすることへとつながり、今後の子どもたちの学びを深めるものになると考えている。

英語を用いて仲間と関わる

本校では、3年間の英語の授業を通して、最後には子どもたちが、「色々な話題に対して自分の意見や考えを持ち、英語で表現し合えるようになる」と

いう目標を持っている。本校英語科の核となる学び「英語を用いて『他』とのかかわりを深め、世界観を広げる」は、この目標をもとに設定されている。この核となる学びに迫るために、「意見や考えを述べ合う」活動を日々の授業の中で繰り返し設定している。3年間のカリキュラムにおいて1年生初期の段階では、身近な話題に触れながら、自分のことを表現し相手のことを尋ねる活動を中心に据えて指導している。コミュニケーション活動を通して得られる、仲間に対する新しい気づきは、様々な視点から他の面にも見て気づくという自分の視野を広げるための第一歩であり、他とかかわることで自分の世界観を広げることへとつながるものだと考えている。

2 学びのストーリー

(1) 相性チェック！ (第1時)

この単元の目標や意義を確認するところから授業が始まる。

教師：Unit3's goal is 会話上手になろう！会話上手になるとなんかいいことあるかな。

生徒：外国の人とコミュニケーションできる！

人気者になれる！

人見知りがなくなる！

話が盛り上がる！

友達が増える！

就職に有利！

いろいろな意見が出てくる。会話上手になることに対して肯定的な意見が出される。

教師：I think there are many good points.

じゃあどんなのが会話上手って言えるの？
 生徒：話を盛り上げる。
 Eye contact.
 Gesture.
 Reaction.
 Smile.
 Loud voice.
 あいづち。

4月始めの授業から、教師は子どもたちに英語でコミュニケーションをする際に大事な要素をことあるごとに伝えている。子どもたちは、会話上手になるために、それらを大事なこととして認識しているようだ。このように、子どもたちは、会話上手になるとどんな良いことがあるのか、会話上手になるためにはどんなことに気をつければいいのかに対してイメージを持って授業に臨む。

教師は自分の好きな食べ物を程度の副詞を使いながら伝える。I like ~ very much.から I don't like ~ at all.までの言い方を確認する。会話上手になるための第一歩として、自分の好みを詳しく言えるようになることが、本時の表現に関する目標である。

教師：今日は程度の副詞を使って、食べ物の好き嫌いの趣味が同じ人を見つけよう！

教師は、やりとりを使う英文を板書し、生徒一人とやりとりをやってみる。ペアでのやりとりが終わった後、授業の最初にクラスで共有した会話上手になるために大事な観点をもう一度確認する。「もし、同じ好みの人を見つけたら、やったねって感じでハイタッチしたり、意外な答えだったら、Oh, really? って驚いてみたいでしょう」と、相手のコメントにリアクションを忘れないことも付け加える。ペアを変えもう一度ペアでやりとりをする。リアクションを意識することで、1回目より元氣よく英語で会話する生徒が見られる。楽しそうにハイタッチするペアも見られる。生徒一人を指名し、やりとりする。

教師：I like hamburgers very much?
 Do you like hamburgers?
 一郎：Yes, I do. I like hamburgers a little.
 I like curry and rice. Do like curry and rice?
 教師：Yes, I do. I like curry and rice very much. I like 甘口カレー very much. Do you like 甘口?
 一郎：No.
 教師：What taste do you like? 甘口 or 辛口?
 一郎：I like 辛口.

周りがざわめく。子どもたちは甘口か辛口か、自分の好みを口々に言う。日本語ではあるが、このような子どもたちのつぶやきから、カレーが好きか嫌いだけでなく、好みの度合いを何味まで聞くと、

やりとりのおもしろさが増すことが推測される。教師は、「次は、相手のコメントに対してちょっと突っ込んだ質問までしてみよう」と促す。子どもたちは、自由なペアでやりとりを行い、同じ好みのクラスメイトを3人見つけたら自分の場所に戻る。教師としては、突っ込んだ質問をしていく生徒たちの様子を期待したが、子どもたちは、同じ好みのクラスメイトを見つけて、ハイタッチすることに一生懸命で、なかなか突っ込んだ質問までしようとする意識がないようだ。やりとりの後、一人の生徒とのやりとりをみんなに見せる。

教師：I like hamburgers very much. Do you like hamburgers?
 玲奈：Yes, I do. I like hamburgers very much.
 教師：Oh, you like hamburgers very much. I like □ースカツバーガー very much. What's your favorite hamburger?
 生徒：チキンタツタ！（勝手に話に割り込んできた）
 教師：Oh, you like チキンタツタ.
 玲奈：I like テリヤキバーガー.
 教師：Oh, I'm sorry. I don't like テリヤキバーガー.
 I like モスバーガー. What's your favorite hamburger shop?
 玲奈：I like モスバーガー。（教師とハイタッチ）

「マックでしょ」と周りがざわめく。このざわめきから、やはり、子どもたちの中にはこだわりを持っている者も多くいるため、突っ込んだ質問をすることで、より会話が弾んでいくように推測される。

子どものつぶやきは、時として、子どもの素直な気持ちや関心のある内容を表している。教師はそのつぶやきを即時に拾いながら、英語で返していくことが大事である。そして、出てきた話題に関するやりとりをペアで行っていくことも大切である。今回の場合は、カレーが好きかどうかだけでなく、何味まで好きなのか。ハンバーガーに関しては、何ハンバーガーが好きなのか、または、どこの店が好きなのかまで聞くことで、子どもの意欲や表現力を高めるチャンスだった。

(2) いろんな動詞を使って自分のことをみんなにアピールしよう！ (第2時)

教師：Today's goal is 色々な動詞を使って自分のことをアピールしよう！
 教師：I like soccer very much. I play フットサル. How about you, Takuya?
 卓也：I like aikido. I play aikido.
 教師：Wow! Cool! You like aikido. But Kendo Jyudo Karatedo ... そんな時には I do kendo.
 I do jyudo... 武道の時には do を使うんだよ
 卓也：I do aikido.
 教師：Good. I live in Echizen City. I come to school by car.

How about you, Jiro?
 次郎: I live in Fukui City. I come to school by bicycle.
 教師: I have a blue car. But it is old. So I want a new car.
 How about you, Kenji?
 健二: I have a black bag.... 特に何も欲しくない
 教師: I don't want anything.
 健二: I don't want anything.

このように、様々な動詞 (like, play, live in, come, have, want, read) を、子どもたちのやりとりを通して紹介していく、またそれらをマインドマップを使って板書していく。教師が紹介した様々な動詞を使って、自己紹介をペアでやってみる (板書されたマインドマップを手がかりとしながらやりとりを行う様子が見られる)。教師と生徒のインタラクションから、生徒同士のインタラクションへとつなげる。生徒同士のやりとりの後に、一人の生徒とやりとりを確認する。周りの生徒には、「やりとりの良いところやもう少しこうしたら良くなる場所を見つけよう」と、見るポイントを与える。

教師: I like soccer. I play フットサル.
 正樹: I like kendo. I play kendo.
 教師: kendo だから...
 正樹: Oh, I do kendo.
 教師: I live in Echizen City.
 正樹: I live in Fukui City.
 教師: I come to school by car.
 正樹: え〜と... I come to school by ... dash!
 教師: Oh, 走るは How do you say in English?
 正樹: Run!
 教師: O.K. I run to school.
 正樹: I run to school.
 教師: I want a new car.
 正樹: ん〜と, I want money!
 教師: How much money do you want?
 正樹: え〜と, I want 100億円!

たどたどしく言う部分もあったかもしれないが、ジェスチャーを使いながら、元気よく答えてくれた。良かった点として、Loud voice や Eye contact, Gesture, 積極的な態度、という意見が出てきた。そして、リアクションをもう少しつけた方がよいのではないかという意見もあった。そこで、相手のコメントにリアクションを付けてみることを意識して、ペアを変えてもう一度やりとりを行う。教師も参加する。教師がやりとりを行った和幸君の良かったところをクラス全体に伝える。100%Englishで、なんとか自分の言いたいことを英語で伝えようとしたなどである。また、突っ込んだ質問にも英語で答えていたことを紹介する。そして、What's your favorite team? や Who is your favorite player? などの質問の例を紹介する。教師のアドバイスを受け、再びやりとりを始める。教師は、ペアでのやりとりを見と

りながら、What's your favorite taste? などの表現も全体に紹介していく。

(3) 会話上手は聞き上手!

(第3時)

会話上手になるためには、聞き上手にならなければならないことを伝える。第1時、2時の子どもの様子をふり返ると、子どもたちは自分のことを簡単な英語ではあるが、ある程度伝えることはできる。しかし、リアクションや質問をすることには、まだ慣れていないように感じられた。まず、第1時、2時をふり返り、相手の自己紹介に対して、どんな質問ができるのかを確認する。教師は、それらの英文を板書をする。Do you ~? や What ~do you like? や What is your favorite ~? などが出てきた。次に、どんなリアクションができるかも確認する。Oh, I see. や Really? Me, too. などが挙げられた。教師はリアクションをすることの大切さを改めて伝える。「うなずいたり、相槌をうったり、相手のコメントを繰り返したり言ったり、リアクションをすることは、自分ではあなたのことをちゃんと聞いていますよ」というサインになることを伝える。そして、実際のこれらの質問やリアクションをやり取りを通して使っていく。「子どもたちは、リアクションや質問の英文を知識として持っていて、それらを使う機会がなければ、練習しなければ、実際に使うことはできない」という思いが教師の中にある。そのため、ペアを変えながら繰り返しやり取りを行う。そして本時に限らず、授業の終盤では、「今日、自分が使った英語」を確認するために、自分がやりとりでしゃべった英語、本時であれば、質問文やリアクションをノートに書き残す。自分が実際にしゃべった英語を書き残すという作業は、それらの英語を習得することへの手助けになるのではないかと考えているからである。

(4) 理由をつけることは大事!

(第4時)

まずウォームアップとして、"What color do you like?" というお題でペアでやりとりを行い、クラスメイトの好きな色を聞き合う。前時のポイントの1つであった、リアクションやリピティションを忘れないことを付け加える。クラスの好きな色ランキングはどのような結果なのか全体で好みを共有する。一人一人それぞれ個性があり、色々な好みがあることが分かる。次に、今日の帰りの会では、クラスで席替えがあるということで、"What is your favorite place?" というお題でやり取りを行った。ここでは、Why? や Because ~. を用いながら、なぜその場所がいいのか理由まで述べることを子どもたちに求めた。Because 以下は日本語でもよいとした。結果を共有

すると、一番後ろを好む生徒がほとんどだと予想していたが、一番前や真ん中の左右など、好みも理由も人それぞれで、様々な子どもの意見が出てきた。やはり子どもに与えるトピックは、子どもと関連性があったり、話題性があったりするものだと、自己表現をしたり、相手の意見を聞いたりする意欲が高まるのだと改めて感じた。

(5) 会話上手になろう！パート5 (第5時)

本時の目標を、「会話上手になろうパート5」と題して、「クラスメイトとの共通点や意外な一面を探り、新たな友情を築いていこう」と伝える。ウォームアップとして、"What day do you like the best?" "I like ~day."というように、何曜日が一番好きかを尋ねあう。まずはALTとJTEとのやりとりを見て、用いる言語材料や、やり取りの仕方を把握する。Why?やBecause~.を用いながら理由も聞きあう。「このクラスの人気ナンバーワンの曜日は何曜日かを探ろう!」という教師の呼びかけに対して、5人のクラスメイトとやりとりを行う。

やりとりが終わり、何曜日が一番人気があったのか結果を聞く。日曜日と土曜日が、やはり多かった。そこで、自分は何曜日が好きなのか手を挙げ、実際の人気ランキングを調べる。日曜日は9人、土曜日は14人と分かる。次に、手を挙げなかった生徒たちを立たせ、少数派の意見を聞いていく。少数派の意見を聞くということは、その子どものこだわりが聞けたり、意外な一面を知ることができたりして、興味深いと考えるからだ。何人かが立つ。教師はまず一人を指名し、みんなで聞いてみる。

生徒：What day do you like?

竹丸：I don't have favorite day. (笑いが起きる)

教師：えっ? Why?

竹丸：Because all day is so so.

教師：Oh, you are so so. Oh, you are not fine every day.

立っている生徒の中で、同じ意見だったら座っていく。次の生徒は、金曜日が好きで、次の日が休みだからと答える。同じく金曜日が好きな人は5人いた。次に当てられた五郎君は、"I like holiday."と答え、周りから"Me, too!"との声があがる。同じ意見の人は座る。



I like holiday.と答える五郎君。

立っている生徒は残り2人となる。周りでは、興味津々にその2人の意見を期待している生徒も出てくる。ALTに当てられた慎二君は、火曜日が好きだと答える。ざわめくクラスメイトに対して、"I like baseball."と答える。教師とのやりとりを通して、火曜日にクラブチームで野球の練習をしていることが分かる。最後の一人は香織さんである。"I like Monday."と答える。理由は、日本語で「木曜日に録画したビデオを見るから。」と答える。教師の支援で"I watch TV shows on Monday."と英語で言い直す。

このウォームアップでのやりとりから出てきた意見をふまえて、自分と友達との共通点や意外な一面を自己紹介を通して見つけることの楽しさを再び確認する。次に、どのようにペアでやりとりをするのか、JTEとALTの例をパターンA、パターンBというように2パターン見る。どちらのやりとりが好ましいかという観点で例を見る。パターンAの方が悪い例で、パターンBの方が良い例である。比較することで、どのようなことに意識してやりとりをすればいいのかが伝わりやすいと教師は考え、子どもたちには2パターン見せた。パターンBのどこが良かったのかを確認すると、今までの授業で大事にしてきた、Eye contactやReactionなどといったことが出てきた。また、理由など付けたし文もあったという視点も出てきた。子どもたちから出てきた意見を踏まえ、もう一度実際にやりとりを試みる。大体の生徒が、コミュニケーションの際に大事な態度を意識しながら、やりとりをしていたようである。



ペアでやりとりをする生徒たち

ALTに指名された愛華さんが実際にやりとりをALTとやってみる。指名された愛華さんは英語が好きで得意だということもあり、ALTとのやりとりを上手にこなすと同時にALTの突っ込んだ質問にも難なく答えていた。やりとりの後、このやり取りの中で気付いたことを発表する。態度面の意見は出てくるが、突っ込んだ質問をして相手の情報を引き出していたという視点は出てこなかった。そこで、今度はJTEとALTのやり取りを見る。お互い相手のコメントに質問したり、自分のコメントに付け足して相手にも聞き返したりしながら会話を膨らませ、会話を続けるといった見本である。「どこが今までの自己紹介と違ってレベルアップしてたかな？」と問いかけるが、教師が期待する答えは出てこなかった。そこで、明示的ではあるが、会話の一場面を切り出しながら説明する。

教師：I like soccer. Do you like soccer? 何してた？

生徒：付け足してた。

教師：っていうか…？

生徒：質問してた。

教師：Good! (意見を板書する) And…What sport do you like?

ALT：I like cricket.

教師：Oh, I don't like cricket, sorry. っていうように相手のコメントに対して、自分はこうだよって言うこともできるね。(板書する)

教師：(ALTとのやりとりの後) Oh, I see. とリアクションした後、自分の意見を付け足すこともできるよ。(板書する)

教師のイメージする理想的なやり取りは会話のキャッチボールであることを伝える。



教師が板書を交えてねらいを伝えた後に、再びペアでの会話活動が始まる

また、どんな質問ができるか、生徒に聞きながら、様々な質問例を板書する。ここで、教師は、会話をするトピックをスポーツか音楽かというように限定してしまう。当初のねらいでは、教師は、「本時では、自己紹介をお互いしながら、自然な形で、質問やコメントを付け加えて会話を膨らませていく」ということをやりたかったが、子どもの反応や様子を見て、プランを変えてしまう。

次に、生徒が会話をする上で、同性同士の方が好みが出て質問もしやすくなると考え、同性同士のペアになるように列も入れ変える。会話上手になるためのポイントを意識しながら、やりとりに挑戦する。

やりとりを見ていると、スポーツも音楽も興味がないというような生徒がいたため、どんなトピックに関心があるか、急遽、子ども達に聞いてみる。食べ物やテレビ番組、芸能人、マンガなどが出てきた。「話す内容はどんなトピックでもいいよ」と伝える。活動が停滞している子どももうかがえる。振り返ってみると、恐らく、ペアでの会話活動がほとんどの授業デザインだったためであろう。とにかく会話を楽しもうと伝える。3分間という時間を設定し、「今日まだしゃべっていないクラスメイトとしゃべろう!」という指示のもと、クラスメイトとやりとりをする。

最後に、今日の時間を通して、会話上手になれたか確認する意味で、一番最初のペアとやり取りをした。感想を見ると、「1番最初にやった時より、ぐーんと上手くできました!」「いつも以上に会話が盛り上がって楽しかった!」という肯定的なコメントもあり、多くのペア活動を通して、子どもの発話の量も質も高まったのではないかと推測される。ペア活動が多いために、子ども一人一人の発話を見とることは難しいが、書く活動を最後に入れると、表現の定着を授業後に見とれたかもしれない。

3 省察

(1) 3年間の学びの中で1年生初期に必要なこと

3年間を見通す中で、1年生初期段階で大切にしたいことが3つある。まず、コミュニケーションの楽しさ、友達の意見を聞く楽しさを味わってほしいということだ。簡単に言えば、英語を好きになってほしいということである。2つ目に、望ましい話す態度や望ましい聞く態度をもって、相手とやりとりをしてほしいという願いだ。これは願いというより、英語の授業で相手と意見交換する際の基本的な態度を、この初期段階で身につけなければならない当たり前のスキルとして考えている。実際、このことは授業中に何度も繰り返し、子どもたちに伝え指導しているため、子どもたちの態度面への意識は高まり、このスキルを身につけている子どもも多いように感じられる。ただ、その子どもの性格的な面やペアの人間関係に左右される部分も多少なりともあるようだ。そして3つ目に、英語の授業を通して、クラスメイトとやりとりをしていく中で、お互いのことをより深く理解していき、より良い人間関係を築いてほしいという付随的な期待である。実際、ふり返りシートを見てみると、「英語の授業を通して、普段はあまりしゃべらない子と楽しく会話でき、新たな友情が生まれた気がします。」という嬉しいコメントを残してくれる子どももいたり、友達との共通点を見出した際には、「Me, too!」などとリアクションをし、うれしそうな顔をする子どももいたりした。毎時間、様々なトピックで、様々なクラスメイトと自己紹介をし合っていく授業をデザインすることで、子どもの中では、毎時間、クラスメイトに関する新しい気づきがあったのかもしれない。

(2) どのように英語を用いて他と関わるのか

教師－生徒間のインタラクションから、生徒同士のインタラクションというように、教師や同じクラスメイトとのやりとりを通して、英語を用いながら他と関わっていく。これらのインタラクションの有効性は「研究紀要第38号2010」で語られているが、今回の実践をふり返ってみると、教師の授業のコーディネート力の至らなさが何度となく見られた。

具体的な例で言えば、第1時では程度の副詞を使った自己表現活動だったが、そのやりとりの中で、「カレーは甘口か辛口かどちらが好きか」や、「何バーガーが好きか、どのこハンバーガーショップが好きか」などといった話題が出てきた。そこで、子どもたちの食いつきが良かったことを見取り、その話題を英語でやりとりしてもおもしろかったかもしれない。単に「カレーやハンバーガーが好きか嫌い

か」といったやりとりよりも、子どもたちのこだわりが出てくる場面で、子どもたちは自分の好みを言いたく、相手の好みも聞きたかったように思われた。コミュニケーションへのモチベーションが高くなる場面を生かしきれなかった。教師と生徒のインタラクションから、生徒同士のインタラクションへとつなげ、他の周りの子どもの表現面や内容面の深まりを促すことを意識していきたい。

また、「他と関わる」ためには、自分の意見をお互いが言い放しではいけない。相手の意見に対して、何らかのリアクションがなければいけない。実践をふり返ってみると、子どもたちは、自分のことを英語で言ったり、教師の問いかけに英語で答える力はあるように感じられた。しかし、相手のコメントへのリアクション、特に相手の情報や意見を引き出すための質問が臨機応変になかなか上手にできないようである。確かに、話している内容が、自分に興味が無いようなことであつたら質問することへの意欲は低くなるであろう。しかし、相手の発言内容を確認するリピティションであつたり、相手のコメントに関連した質問をしながら話の内容を深めるという視点やテクニックは、大事なことである。今後は、与えるトピックを厳選したり、トピックの与え方や取り組み方を工夫したりしながら、相手の意見に反応できる生徒を育てていきたい。

(3) 単元全体や1時間の授業での目標を示す意義

本単元では、「会話上手になろう!」という大きな目標を第1時に子どもたちに提示し、毎時間、「会話上手になるための本時の目標」を伝えてきた。例えば、「今日は様々な動詞を使って自分のことをアピールしよう!」とか「今日は聞き上手になろう!」などといった具合である。英語の授業では、普通一般的に、教室内での教師－生徒間のオーラルインタラクションから授業が始まる。そして、そのやりとりがモデルとなり、生徒同士のインタラクションにつながっていく。教師は、子どもたちの反応や発言を見取りながら、子どもたちの英語の表現面を様々な形で支援していく。最初戸惑っている子どもたちも、英語を使用していく中で、自分の言いたいことと言えることのギャップに気づき、教師の明示的・暗示的なフィードバックを受けたり、クラスメイトのモデルとなる表現を聞いたりしながら、自然と目標言語材料を習得していく。このような授業スタイルは、もちろん、筆者自身も目指しているところではあるが、最初の教師－生徒間のオーラルインタラクションの前に、本時の目標や活動の目的を日本語を交えて、板書もしながら明示的に子どもたちに示

してきた。

この試みの理由は、1つ目に、この単元を学ぶことで身につけてほしい姿、未来の自分たちのあるべき姿を子どもたちが意識しながら、毎回授業に臨んでくれることを期待したからである。2つ目に会話上手になるために必要な要素を毎回の授業の中で1つ1つ使えるように意識しながらコミュニケーション活動に取り組んでくれることを期待したからである。ただ単に英語を使ったやり取りをするのではなく、なぜこのコミュニケーション活動をするのかを子どもたちが理解することができ、子どもたちは毎回の授業で見通しを持ったり、英語での活動の必然性を感じたりして、意識を高く持って授業に臨むであろうと考えたからだ。3つ目に、特に英語が苦手な生徒、低学力の生徒にとっては、単元の毎時間の見通しが立つと安心して授業に臨めるのではないかと考えているからである。4つ目に、単元を通して、または1時間1時間の授業を通して、お互いに評価し合ったり、自分でふり返ったりする場面を設けているが、その際、最初に提示した目標を達成できたかなどについて確認することが、子どもの達成感や自信につながると考えているからだ。5つ目に、教師のこの単元で大事にしていることへの思いやその

ためにどんなことを身につけてほしいかという願いが、子どもたちへ伝わってほしいと思ったからだ。

実際、子どもたちの中には、ふり返りシートの中で、提示した目標と自分の達成度を比べながら自己評価している者もいた。教師の思いをくみ取り、単元中や単元が終わってからでも「会話上手になるために…」という発言をする生徒もいた。この単元前や授業前に目標を提示するということは、子どもたちの学びを支えることに対して、多少なりとも一部の生徒には効果があったかもしれない。

(4) 単元のデザインを問い直す

本単元では、会話上手になるために、主に話すことに力を入れた。確かに大事なことはあるが、話すことと書くことを毎時間関連づけて、自己紹介文や会話の再現文を書くという活動を盛り込んでもよかったかもしれない。子どもの表現力の成長が、教師も子ども自身も目に見える形で分かり、子どもが、より達成感を味わったかもしれないと推測するからだ。本単元の最初に書いた自己紹介文と、最後に書いたものとを比べてみても面白かったかもしれない。

(伊藤 文彦)

参 考 文 献

- 大下邦幸著 『コミュニケーションクラスのすすめ』 東京書籍 2009
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第34号 2006
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第37号 2009
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第38号 2010
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第39号 2011
 福井大学教育地域科学部附属中学校 『研究紀要』 第40号 2012